

私たちはハウードの田園都市論から近代都市計画やニュータウン計画がスタートしたという認識をもっている。そしてそれはある意味で正しいのであるが、「郊外」の計画的開発がそれ以前になかったというわけではない。今回千葉大学の服部孝生先生に表紙をお願いしたところそういう事例のひとつである19世紀初頭のブレイズ・ハムレットというプロジェクトを紹介していただいた。ハウードをさかのぼること100年、産業革命によって生み出された都市労働者やその中の成功者たちの住宅問題に対しさまざまなチャレンジが行なわれていたのである。たまたまこの雑誌でも寄稿をいただいたことのある環境計画機構の井出建氏が翻訳中の「SUBURB」という書物を見せてもらったが、ブレイズ・ハムレットとともに1795年の「The Paragon」という郊外開発などが紹介されている。この書物によれば、この時代の郊外をPrototypical Suburbと呼び、その後の郊外の実現カテゴリーをRailroad Suburb、Streetcar and Subway Suburb、Industrial Village、Resort Suburb、Automobile Suburbと整理している。この200年の都市拡大が交通手段の発達によることはいままでもないが、ハウード以前のプロジェクトを目にする機会は少ない。これからの都市を考える上でも歴史をひもとくことに意味があると感じている。

アメリカで住宅地計画の実務に携わった筑波大学の渡和由先生にアメリカの住宅地開発というテーマで連載をお願いした。今回は生きたデザイン思想ともいうべきものが感じられて興味深く読んだ。次回以降もご期待ください。

エッセイ2本。都立大学の小林克弘先生はアメリカに強いアーキテクトという印象が強いが、

多摩ニュータウンのコンペで住宅地計画の分野に登場された。宮脇檀先生のご逝去でアーキテクトの住宅地との関わりは藤本昌也、岩村和夫両先生のみになってさびしい思いをしていたが心強いことである。チームネットの甲斐徹郎さんとは「つくば方式」を通じて知り合った。建築研究所の小林秀樹さんが中心になって開発した「つくば方式」は定期借地権、スケルトン・インフィル、コーポラティブという異なったツールを組み合わせ、住宅供給の可能性を拡大したが、その有効性をこのエッセイでも感じていただけたと思う。

有名住宅地シリーズは成城です。多彩な活躍をみせる酒井憲一さんに執筆をお願いしました。2回の連載になります。貴重な歴史の証言ですが住宅地計画に如何に生かせるのかは読者の側の問題です。

大和ハウスから独立された馬木浩重さんにポエムノール枚方でのまちづくりを、前回に続いて前園百合子さんにハーモニーフォレストのまちづくりをご報告いただきました。

昨年行なわれたまちづくりシンポジウムは会場に笑いがたえないという珍しいシンポジウムでした。岩村和夫さんの基調講演「時をつなぐ住まい」を受けて、ウスビ・サコ、米原万里、ねじめ正一（敬称略）という多彩な顔ぶれが住まいや環境に関するうんちくをかたむけるのですからたまりません。ご一読ください。

八王子みなみのシティ第3次は売れ渋っていますが、環境の作り方にいろいろ工夫を凝らしました。ご指導いただいた連健夫さんにその経緯について執筆をお願いしました。

大阪府営住宅で試みた環境共生住宅のその後の経緯について林史朗さんからご報告いただきました。地球にやさしいということを実践することの難しさがわかります。（大川）